「キリストこそ平和」

エペソ人への手紙２：１１－１９

July.10.2022

エペソ人への手紙２：１１－１９（パワポ）

Preface

かつてイスラエル民族は、世界の人々を、イスラエル人と異邦人、またはイスラエル人と“犬”という分け方をしていました。

当然エペソ書の著者であるパウロ自身も、異邦人や犬の方ではなく、生粋のユダヤ人イスラエル人に属する特別な人種・民族の一員だと思っていました。

神に選ばれし民族、与えられた聖なる約束の地、また神の声を記した旧約聖書の所有というとても大切なことを、至って外見的、表面的、形だけ、上辺だけのこととして捉え、自分たちイスラエル民族の優位性を真剣に説き、それをそのまま民族のアイデンティティーとしていました。

最終的には、自分たちの民族的優越意識を壁として自ら打ち立てることをもって、「この壁を越えて来ることは、どの民族・人種も出来ない」という差別意識をイスラエル民族のプライドとしていました。

さらには、そのプライドを宗教化し、「このプライドを守ることこそ信仰だ」と真剣に思っていました。

信仰とプライドの区別が、つかなくなってしまいました。

この民族のプライドは、なにもユダヤ・イスラエル民族だけのものでなく、全世界どこの国、どの民族部族どの人種、どの個人、どの地方にあっても存在します。

サッカーが上手い下手だということで誇ったり見下げたりすることもあれば、手づかみで食べ物を食べたり食べなかったり、肌の色が白かったり白くなかったり、その国の言葉が話せたり話せなかったり、はたまた民族の歴史や風習などを、他国や他民族との違いを明らかにする自らのプライドの拠り所にしたりします。

これは、移民や外国人労働者に対する差別などに、良く表れているでしょう。

他国や他民族という国際関係のみならず、それぞれの国の国内、国民同士、同胞同士においても同じです。

社会的な階層、階級、部類、序列、血統、家柄などがあたかも当然の秩序であるかのように平静を装いながら存在しています。

ですが、「私は、僕はそんなことは致しません」とほとんどの人が思い込んでいて、自ら他者との隔ての壁を打ち立てて、他者との違いを見せつけようとしていることには中々気付きません。

私自身、外国籍、在日韓国・朝鮮人として日本で暮らしていて「ああ、ちょっと嫌だなあ」と思う言葉があるのですが、それは「日本人らしいねえ」という言葉です。
礼儀正しくて、奥ゆかしくて、仕事が丁寧で、清潔で、ちょっとシャイな感じでしょうか、「そうすると、あの外人さんは日本人よりも日本人らしいねえ」という言葉が、褒め言葉としてどこからともなく聞こえてきます。
でもそうでないと、「ほら、外人さんだから！　日本人じゃないから！」と、これまたどこからともなく聞こえてきます。
ここに隠されている無自覚の差別意識は、「日本人は良い人、じゃない人は良い人じゃない」という自ら打ち立ててしまっている隔ての壁です。

この無意識、無自覚な隔ての壁は、どの国家、どの民族、どの人種、どんな個人にもあります。
私自身、今度は、私自身の出身や経歴など、上辺だけのものをもって優位に立てるような場面に遭遇しますと、「ほら、あの人は僕とは育ちが違うから、ああなんだよ」と、自ら打ち立てた隔ての壁をもって、他者を見下げてしまいます。

では、なぜ人はこんな隔ての壁にしがみついてしまうのか？
神との間に自ら押っ立てている隔ての壁に気付けていないから、気付こうとしないからですね。
神との間に打ち立てている隔ての壁を認めようとしないことから来る不安ゆえに、自らの壁をもって自らを正当化しようとします。
他者と比較をして優越意識に浸っていたいから、人との間に真っ当な根拠のないプライドという隔ての壁を熱心に自ら押っ立てしまいます。

そしてついには、この隔ての壁がただの壁ではなく、敵意へと変貌し、個々人同士葛藤し、争い、戦い、やがて民族・国家間同士戦争し、殺し、殺されるという事を起こしてしまいます。
なのに、殺し、殺されるという争いの後に待っているのは、自省、反省、悔い改めではなく、また新たな壁を押っ立てて、自己肯定へと走ってしまいます。

これが、今、世界で行われていること、私たちの間で行われていることの真相です。

こんな私たちの隔ての壁だらけによる敵意を打ち壊すために、主イエス様は隔ての壁などない赤ん坊の姿をもって私たちの間にお生まれなさいました。
そして、当然のように私たち皆が経験する痛みや苦しみや孤独や虚無感など、私たち以上にご経験され、ついには、神と私たちとの間にある罪という隔ての壁を打ち壊すために十字架に架かり、まず私達と神との和解を達成させ下さいました。

次いで今度は、私たち人間同士の間にある隔ての壁のくだらなさに気付かせ、打ち壊し、敵意を滅ぼし、隔たれていた私たち人が和解し、まことに一つになる道を切り開いてくださいました。

Part One

そして、この隔ての壁が打ち壊され、敵意を滅ぼし、与えられた聖霊によって一つのからだとして回復した平和と和解の具現化が、イエス・キリスト自ら代価を払って生み出した教会であり、教会こそ、世に示す平和と和解と回復のモデルであるはずです。　　いや、モデルです。

神様は、今現存する世界を良しとは思っておられません。

天地万物を６日間かけてお造りになった創世記１章２章の世界は、「非常に良かった」世界でした。

しかし、人類の罪ゆえに堕落したこの世界は、良い世界ではなくなってしまいます。

それを、神様はただ指をくわえて見ておられるのではなく、回復を、再生を、そして世界を造りかえる再創造をご計画され、「それを何としてでもなす」と実行に移されました。

しかし、ただ力づくで、なりふり構わず、要らないものを振り払うかのように暴力によって造りかえようとされるのではなく、自ら神であられることをかなぐり捨てて神自ら犠牲となって、まずは、こんな世界になってしまった根本的原因である本来神のかたちに造られた人をキリストによってお救いになることから始めなさいました。

次いで、その救いに与った者たちによって形成されるキリストのからだである教会を、やがて訪れ完成する全き平和、平安、光に包まれた、唯一まことの父なる神様を誰も何の疑いもなく認識できる本来あるべき隔ての壁など一切ない新しくされた素晴らしい世界のひな型・モデルとして、今あるこの不安定な世界に教会を置いてくださいました。

エペソ書２章の今日の聖書箇所は、土浦めぐみ教会と韓国大方教会の和解の交わりであるコイノニアのテーマ聖句でもありますが、

１２年前のこのコイノニアの交わりを社会学的な見地から取材して、論文にしたいという申し出を受けて、ステファニーというドイツ人留学生が壮年コイノニアに帯同したことがありました。

そうして書き上げた論文の結論で、めぐみ教会と大方教会のコイノニアの交わりは、日本と韓国の小さな一つの地域教会同士の交わりという枠に収まるものではなく、平和や和解という社会的な見地から見ても、大いに評価に値するものであり、平和と和解の一つのモデルとなると言いました。

で、実際にアスペン国際平和会議に清野先生とキル先生が招かれたことがありました。

ステファニーが論文完成を記念して、ピスガで講演をしてくれたことがありましたが、その時も彼女は、「めぐみ教会と大方教会の皆さんのコイノニアの交じりは、地域教会の交わりという枠に収めて置くような小さなものではないことを、ぜひ自覚していただきたいと思います」と言っていました。

神様は、確かに、教会を新しい天と新しい地のモデルとしてこの世において下さっていることを、彼女の言葉から客観的にも確認できた思いが、その時しました。

そして、この教会を形成している部分部分、一つ一つが私たち一人一人です。
詰まるところ教会は、集まる場所でもなく、通う場所でもなく、会議や集会を開くところでもなく、働いて収入を得るところでもなく、私たち生身の人間一人一人が教会です。
要するに、「私が土浦めぐみ教会です、土浦めぐみ教会は私です」と言えるのが、教会です。

もし教会が、スーパーに行くように、スポーツジムに行くように、会社に行くように、何かの趣味サークルや社交場に行くように、何かこう利用する場であるならば、それは、その人にとって教会は教会ではなく、ただの会費を払って通うクラブ活動のようなものでしょう。
もちろん、教会は楽しいところであり、何だか満たされるところでもあり、霊的渇きを潤されるところでもありますが、教会は厳密に言いますと、場所ではありません。
先週の日曜日、柳長老が天の御国へと凱旋されましたが、柳長老の生き様は、まさに、「『私が土浦めぐみ教会です。土浦めぐみ教会は私です』というような生き方であられたなあ」と、青二才の私にでも一目瞭然の人生を生きられた、正に土浦めぐみ教会だった方だと思います。

神様が何を教会に期待し、何を実現し、何を表したいと思っておられるのかをひた向きに追い求めた、まさしく「私が教会です」という生き方をされたキリストの聖徒であられたということをたくさんの方々が思ったと思います。
「一日５分でもいいから、聖書の言葉を読まなくては恐くて一日たりとも生きることが出来ない。そして主日厳守」と仰るほどに、恐れるべきお方をしっかりと恐れる恐れのない人生を生き、キリスト者という教会を神様がこの世にモデルとしておいて下さった理由と期待を常に考える生き方だったと思わされます。

では神様が、この世界に、キリスト者という教会を置かれた理由と期待は何でしょうか？
平和の実現と和解のある共同体です。

Part Two

先週まで見てきましたエペソ書２：１－１０の内容は、信徒一人ひとり個々人に起こった救いの凄さ、恵みについてパウロは語ってきましたが、
今日のエペソ書２：１１からの内容は、救われた聖徒たち一人ひとりの集まりであるキリストをかしらとする群れ、教会共同体について述べていきます。

特に今日の聖書箇所は、人と人との間に人間自ら押っ立ててしまった隔ての壁を、イエス・キリストがその十字架によって打ち壊し、人と人との間にある敵意を廃棄し、人と人とが一つの御霊によって命の通い合う神の家族とされたことを教えてくれます。
そして、そのような命の通い合う有機的状態を“平和”、または“和解”という言葉を用いて表現します。

平和という言葉はイエス様も福音書の中で用いておられますし、他の聖書箇所にも比較的たくさん出てくる言葉なのですが、“和解”という言葉は、実はパウロ独特の表現で、パウロの書いた手紙にしか出てきません。
パウロ自身、間違った神観をもって、熱心に聖書を説く宗教家として活動し、多くのクリスチャンたちを取っ捕まえて迫害していた過ちを神様に赦して頂き、キリストにある救いを頂いたという恵みを、神との和解と言うほかなかったのでしょう。

また、そんな彼の経験は、パウロにだけ適用されるものではなく、普遍的に、全人類とこの世界に適用できるものです。
神と人との和解、人と人との和解、そして、神を中心とした人と被造物（すべての造られしもの）との和解という風に、パウロは、福音を和解という言葉を用いて表現しました。

ローマ人への手紙５：１０－１１，１（パワポ）

和解こそ福音です。
私たちが神の敵であった時、イエス・キリストの死により、神と和解させていただいたことこそ福音であり、この神との和解こそ救いだということです。

また、生まれながらにして神の御怒りを受けている敵であった私たちを主イエス様の死を通して和解して下さったのみならず、

コリント人への手紙第二５：１８－１９（パワポ）

と、キリストにある和解の務めこそ福音の実践であり、決裂と争いのあるところにその務めを実践することを、教会である私たちに、神様が委ねてくださいました。
言わば、和解の実践は、神の宣教の核であり、神様が最も望まれる宣教活動で

あることをパウロは与えられた霊的洞察力をもって見抜いたわけです。
　即ち、聖書そのものが書かれた理由を、「葛藤、対立があるから」と言っても過言ではないということです。

Part Three

　私たちが接することの出来るすべての関係は、大なり小なり壊れています。
　そして、そこには、多かれ少なかれ葛藤・対立があります。
　人と人、国と国、民族と民族、組織と組織、夫と妻、親と子、兄と弟、姉と妹、そして、人と自然、人と環境、人と動植物、人と宇宙。
　そのような葛藤があるゆえに、神の福音が必要であり、神の福音は、私たちを和解へと導いてくださいます。

　福音は、存在することの出来るすべてのものを和解へと導き、平和という関係を維持するために神様がお表しになった真理です。
　そして神様は、今ある葛藤をも通して新しい歴史を造ってくださいます。

　人を神様と和解させ、人と人を和解させ、すべての被造物に和解の恵みを与えるために、イエス・キリストをこの地に送ってくださいました。
　そして、その和解の完成形が、キリストの再臨によって完成する新しい天と新しい地ですね。

イザヤ書６５：１７－２５（パワポ）

　この新しい世界の小さなモデルが、私たちキリスト者という教会です。
　イエス・キリストの十字架上の贖罪は、神様の和解の働きの根拠であり、動力であり、理由です。

　クリスチャン社会学者であるドナルド・クレイビルという方は、「和解は、福音の中身である。この福音は、人間と神との隔ての壁を溶かし、人間同士の間にある壁も打ち壊す」と言いますが、その通りだと思います。
　和解のない福音は、何の意味も成しません。
　つまり、和解の完成によって、福音は達成します。
　和解こそ、福音の核心であり、神様の業の核心であり、救いの中身です。

コロサイ人への手紙１：２０－２２（パワポ）

　イエス様がこの地にいらっしゃった目的は、私たちを含めた万物を和解させるためです。
　和解の成就のために、十字架にて死なれました。

　ヨハネの福音書１７章の十字架に架かられる前夜のゲッセマネでの祈りの中

で、「父よ。あなたがわたしのうちにおられ、わたしがあなたのうちにいるように、すべての人を一つにしてください。彼らもわたしたちのうちにいるようにしてください。
あなたとわたしが一つであるように、彼らも一つとなることをもって、世がわたしを信じるようになるためです」と祈られたほどに、壊れた関係を修復する和解のための十字架であることを宣言されました。

パウロは今日のエペソ書の箇所で、キリストの死を通して神との和解という救いの恵みに入れられたならば、壁を打ち立てる自己肯定に生きるところから、大きな民族間を隔てていたとてつもない壁を打ち壊し、二つを一つにされたキリストにある和解を成すことの大切さと深刻さを教えてくれています。

さらには、和解の実践にあって最も重要な聖書的根拠となる御言葉は、イエス様の山上の垂訓であるマタイ５章の「平和をつくる者は幸いです。その人たちは神の子どもと呼ばれるからです」という言葉です。

Part Four

平和とか和解とかというテーマは、主なる神様がイエス・キリストの十字架を通して与えて下さる永遠のいのちという救いを除けば、世的にもとても人気のあるテーマでしょう。
こんなご時世なので、今まさに、最大の関心事と言っても過言ではありません。

しかし、その期待とは裏腹に、神様のご介入を無視した和解は、いつどんな時でも一瞬にして互いを傷つけ、苦しめ合う暴力性を全くもって払拭することが出来ません。

救済的暴力性（redemptive violence）という言葉を聞いたことがあるでしょうか？
「悪を追放し、正義を打ち立てる」という名分のもとに行われる、羊の皮をかぶった狼のような暴力性のことを救済的暴力性と言いますが、この救済的暴力性を持たない人は誰一人としていません。
今起こっている戦争もそうですし、子供から大人に至るまで皆私たちの主張する正しさなんて、大概そんなものです。

私たち人間の歴史は、暴力のない世界を人間は作り出すことが出来るという迷信のような事を信じて、戦争と紛争を反復してきました。

今日、人間は、神という存在を覚えなくても、神という存在から出発しなくても、神様に自分自身を預けることもなく、隣人と和解することが出来ると考え、和解しようと努力しますが、残念ながら失敗します。成功しません。

和解とか平和という言葉や活動は、いつでも社会的局面で取り扱われるものですが、社会的にどんなに長い時間をかけても、どんなに高度な技術を投入しても、究極的な解決には決して至らず、良かれと思ってなしたこと考えた平和和解活動も、皮肉にも新しい争いを生んでしまうことがあります。

ならばと、致し方なく神という存在と見掛け倒しの同盟関係を結んではみたものの、内なる憤りを正当化するために結局神様にも敵対し、人間同士も敵対し合う雑然とした混迷状態に陥ってしまいます。
なぜならば、キリストから離れたどんな平和も存在しないからです。

シャロームの神様は、平和の君として来られたキリストを通して、人間を誰一人として放棄されることなく、何としてでもキリストの血の洗いによって救いを達成し、神様との和解を成り立たせ、人同士の和解へと導いて行かれます。

私たちキリスト者は、この和解の働きへと入れられ、また期待されている者たちであります。

聖書は、唯一神のかたちに造られた高貴な存在である人間が、自ら神様に対して不正を行い、罪に陥り、そしてその罪のために、創世直後から人間関係の最小単位である家族関係から亀裂が生じ、すべての関係が壊れて行ってしまったことを真っすぐに伝えてくれます。

罪は、いつも分裂を引き連れて来て、人々を敵対関係にくだけでなく、神様に対しても敵対心を抱かせるようになります。
しかし、すべての敵対心は、キリストによって打ち壊され、廃棄され、滅ぼされることを、使徒パウロは今日のエペソ書の聖書箇所を通して宣言します。
葛藤と対立の痛みを、苦しみを、誤解を、差別意識をすべて抹殺し、キリストが賜わる賜物として和解を経験させてくださることを明確にしてくれています。

Conclusion

二つのものを一つにするという平和の実現、和解について妻と散歩しながら考えていますと、妻がこんなことを言いました。
「私たちは、０．５でいいんだよ。　０．５＋０．５＝１でしょ。
互いに０．５づつ足りないから、一つになれるんだよ」

「ああ確かにそうだなあ」と思いました。
「０．７とか、０．８とか、１のままだと、一つにしようとしても、１．４とか、１．６とか、２とかになってしまって、いつまでも一つになれないなあ」と思いました。
だから、足りなくていいんです。
足りなくていいことを認められること、これが福音ですし、キリストを知った

ことによる恵みですね。

そして、そのキリストの恵みへの気付きが、二つが一つになる和解、平和の実現へと繋がるわけです。

早天祈祷会で使っている教材にこんなことばがありました。

私たちは、どうすれば人と和解できるのでしょうか。相手にして欲しいところを指摘する前に、自分の方こそ直すべきだと気づき、相手に「私にも間違いがある」と伝える時に和解が始まります。これが、神の御前で礼拝する共同体の問題解決方法です。神様と私たちの間で和解のためのいけにえとなられたイエス様は、ご自分が罪人であるかのように人々の中に入って来られ、私たちの罪をご自分の罪として負われました。それによって、神様と私たちの間に和解が生まれました。

「私の周りには、どうして私を傷つける人がたくさんいるのだろう」という考えをやめ、「私はなぜ他の人を傷つけてしまうのだろう」というふうに考え方を変えてみましょう。そのような考え方の中心には、いつも「私は神様を悲しませてしまう人間だ」というへりくだった思いがあります。神様の御前に出れば、他の人が私にしたことではなく、私がその人にしたことが見えてきます。そして、相手に赦しを求めて和解することが出来ます。

これが、私の中の怒りと他者に対する怒りを処理するイエス様の方法です。

クリスチャンの共同体の和解は、誰か一人が一方的に謝ることではなく、互いに自分の過ちについて赦しを求めることです。これこそ、共同体が神様の御前で互いに赦し合い、和解する道です。

今日の説教の内容をすべて言ってくれています。

神様が、私たち教会一人ひとりの目を開いてくださり、まことの平和への唯一の希望が、平和の君、義なる王であられるお方の前に共に集まることであることを、真の平和と和解を知っている私達キリスト者が、世に知らせていきたいものです。

お祈りいたします。

祝祷：エペソ人への手紙２：１４ａ、１６